

二〇二〇（令和二年）年度 金沢学院大学 入学試験問題

推薦入試

二〇一九年十一月二日（土）実施

国語（基礎学力）

一 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから8ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

二 解答上の注意

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、「解答番号は 10 」と表示のある問いに対して

④と解答する場合は、下記の例のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

問1 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

(1) アンケートのカイトウ用紙。

- ① 皆答 ② 解答 ③ 快答 ④ 怪答 ⑤ 回答

(2) デビュー作ながら、悪役をコウエンした新人俳優。

- ① 講演 ② 好演 ③ 公演 ④ 口演 ⑤ 後援

(3) セイケン放送に見入る。

- ① 正憲 ② 政権 ③ 生検 ④ 政見 ⑤ 清賢

(4) もっとタイケイ的に整理して下さい。

- ① 体系 ② 体刑 ③ 体型 ④ 体形 ⑤ 体計

(5) 「必ずやり遂げる」とメイゲンした。

- ① 迷言 ② 名言 ③ 明言 ④ 命言 ⑤ 銘言

問2 次の(6)～(10)のカタカナ語の意味として最も適当なものを、後の語群①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は 6 ～ 10。

(6) コミット (7) タスク (8) ホスピタリティ (9) ボトルネック (10) ミッション

語群	①	②	③	④	⑤
①	重要な任務	おもてなし精神	省略すること	信心深いこと	支援や援助
②	作業や課題	かわりを持つこと	看護・介護	立ち襟	支障をきたすもの

問3 次の(11)～(20)の意味を表す慣用句として最も適当なものを、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

- (11) 他人のやっかいになること
- (12) できる限りの方法をとること
- (13) 世話が焼けること
- (14) 自らすること
- (15) やり始めること
- (16) もてあますこと
- (17) 助けること
- (18) 関係がなくなること
- (19) 必要な手段をとること
- (20) 仕事でひまができること

語群

- ① 手を焼く
- ② 手にかける
- ③ 手を尽くす
- ④ 手を貸す
- ⑤ 手が空く
- ⑥ 手を打つ
- ⑦ 手をわずらわす
- ⑧ 手が切れる
- ⑨ 手を染める
- ⑩ 手がかかる

問4 次の ～ に入れるのに最も適当な語を、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

- (21) 立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は の花
- (22) に鶯うぐいす
- (23) から駒すずめ
- (24) に雀すずめ
- (25) 桃栗三年 八年

語群

- ① 瓢箪ひょうたん
- ② 柚ゆず
- ③ 鳳仙花ほうせんか
- ④ 梅
- ⑤ 薔薇ばら
- ⑥ 柿
- ⑦ 糸瓜へちま
- ⑧ 百合
- ⑨ 竹
- ⑩ 笹ささ

問5 次の(26)～(30)の四字熟語について、誤りがあれば誤っている漢字の番号①～④を、(例)のようにマークせよ。誤りがなければ⑤をマークせよ。解答番号は ～ 。

(例) 四面楚家^{①②③④} ↓ 正しくは「四面楚歌」なので、④をマーク。

(26) 一家団乱^{①②③④}

(27) 挙動不審^{①②③④}

(28) 孤立無縁^{①②③④}

(29) 多言無用^{①②③④}

(30) 单刀直入^{①②③④}

問6 ノーベル文学賞を受賞した日本人作家は二人いる。その二人の作家の作品を次の中から五つ選び、マークせよ。解答番号は ～ 。

作品 ① ノルウェイの森

② 伊豆の踊子

③ こころ

④ 金閣寺

⑤ 古都

⑥ 個人的な体験

⑦ 富嶽百景

⑧ 羅生門

⑨ 雪国

⑩ 万延元年のフットボール

問7 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

慶應義塾大学文学部教授で哲学研究者の山内志朗が、「人生に目的などない」といい切っている。いいなあ。学問に男らしさなどないが、わたしの好きないい方でいえば、男らしくてスカッとしている。目的とは、意味を実現することである。だが、元々人生に意味がないから、目的もあるわけがないのである。山内はこう続けている。

人は「幸せになるために生きる。それはきっと正しいのだろう。しかし、幸せが何だかわからないし、それに辿り着く方法と道筋が明確ではない」。また「神のために生きる」人もいるだろうが、神に「近づく道筋が分かりにくい」。「家族のために生きる」は「分かりやすい」。悪くはない、ということらしい。「自分のために生きる」は「途中で必ず空しくなる」。「名誉と権力のために生きる」は「お好きにどうぞ」。「快樂のために生きる」はその人の勝手だが、「他人に迷惑をかけない」ようにしなさい『目的なき人生を生きる』角川新書、二〇一八。

さらにわかりやすく喩えている。「桜は花が散っても生きているし、花を咲かせるために桜なのではない。桜は満開の花を咲かせるために生きているのではない」「人間の人生もそうだ。人生は幸せになるためにあるのではないし、もしそう捉えてしまうと、幸せではないときは、幕間の休憩時間になってしまう」。ふむ。わかりやすい気がしたのだが、そうでもなかったかもしれない。桜はそのとおりだが、人間は「意味」をもってしまったから、桜と比べられてもちよっと困る。

結局、先生のいいたいことはこうである。人生の目的は「多様性ということが唯一の答え」である。つまり、人生の目的とは固定的なものではないし、一回限りのものでもない。複数の目的があつていいし、生きている過程で次々と継起してくるものでもある。「目的は途中で自発的に現れてくる。目的がこのように生まれてくるものとすれば、目的を達成して、目的を失った索漠たる時間をもてあますことなくすごすこともできるようになる。自生的目的、つまり、自ずと生まれ、目的そのものが目的自身を育てるような目的しか人生の目的はない」。

ちよつとめんどくさいし、わかりにくい。ほんとうのことをいうと、わたしにとってこの本のおもしろさは別のところにある。それは山内の権力嫌いの部分である。こういう人が学者のなかにいるのだ、と驚いた。

「世の中ではアグレッシブな人間ほど攻撃的であり、他者との関係を築くことに長けている。多くの人と知り合いである。人間好きとは、権力関係の顕示であり、知り合いが多いのは、権力の大きさを示すことになる」「集団の中で、一番大声で笑うのは、一番権力を持っている者である。つまらないダジャレ

でオヤジが笑うとき、権力者の笑いこそ一番大声であり、笑うことの強制を含んでいるのだ」。おそらく教授連のなかに、くだらんダジャレを飛ばして大声で笑うアグレッシブな教授がいるのだろう。

また山内先生は、うるさい宴会が嫌いである。なぜなら宴会も権力者の独壇場となるからだ、というのである。「宴会は、権力を確認・拡大する場面であるから、宴会好きの人は権力好きの人であるということに必然的に帰着する。宴会やパーティーで披露される一番の目玉は、数々の料理、銘酒、お菓子ではなく、主催者の権力、いや権力の大きさなのである」「威張るヤツが大嫌いなんだ」という人が、案外権力的であったりすることはよくある」。

これも大学や学会や大学関係の宴会で、謙虚な振りをしながら、権力を見せつけたがる疎ましくもケチくさい輩がいるのだろう。ちよつと会社の宴会とはちがうようである。しかしどこの世界にも威張りたがりはいるものである。

しかし、このあとがいいのだ。「私は盛り下がっている宴会が好きだ。盛り上がる宴会を、たぶん日本人は昔から求めてきたのだろう。新入生に小ネタをやらせて皆で笑って盛り上がるのは新入生歓迎会の伝統的儀礼であるし、小さな盃さかずきで返杯を重ねることで早く泥酔者を作ることが宴会の使命で、そういう盛り上がりこそ、神の到来として喜んできた」「『どんどん盛り上がりましょう！』『盛り上がってますか？』と煽り立てることが、年配者の役割であるかの如く振る舞う人も多い」「無理して酔っ払って、無理して盛り上がって、そこに神を呼び込まねばならないのだ」。

だから山内はこう断言する。『盛り上がらない宴会』が私は好きだ。権力のご披露宴や権力センサー機器点検とは無縁だから。しかし生憎あいにく、日本で「盛り上がりがない宴会」は許されない。ばかのひとつ覚えの言葉が発せられる。「こちら、お通夜？」。そんなことにでもなったら、幹事はあとで叩たたかれることになる。わたしは宴会じたいが嫌いである。パーティーも好かん。わたしが無類の酒好きだったとしても、好かん。宴会やパーティーのなにがおもしろいのか。

漫画の『最強伝説 仲根1』のなかに、主人公の仲根秀平は、友人たちが誕生日を祝ってくれているときでも、内心「誕生日…？ ザケンなっ…！ 何がめでてえんだよ…！ 人の誕生日にかこつけて騒ぎたいだけだろうが…！」といらつく場面がある。わたしにはこの「騒ぎたい」気持ちがあつたくなかないだ。いくつになっても友人や後輩たちが集まる誕生日会って、なにがうれしいのだ。

山内先生、ごめん。本筋でないところをおもしろがって。ちよつと自分で勝手に盛り上がってしまった。話がそれってしまった。元に戻そう。先生は『なぜ』なしに元気を出せることが大事」といつているが、たとえ目的や意味がなくても「元気を出せることが大事」ということである。山内は、人生に意味がないのは「答えではなくて、出発点なのだ」という。「意味のなさとは自由ということだ。生きてみよという誘いの言葉だ」「意味がないのは、人生の大前提

なのである」。

そのとおりだと思う。それに、「人生」というと、掴み方が大雑把になる。どうしても、学校、就職、恋愛、結婚、家族……という節目節目が主となってしまう。だが、人生はそんなものではない。わたしとしてはよくやったよ、と総括して終わりというものでもない。人生が終わろうとしているときに、そんな総括をしても意味はない。人生は日々の一日に宿っているのである。日々の小さなすべきことの集積が人生を作っている。

(勢古浩爾『人生の正解』による。一部改変。)

問い 本文の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。解答番号は

36

45

。

- (36) 哲学は男らしい学問である、と著者は思っている。
- (37) 人生は無意味なので、そもそも目的がない、と山内先生は述べている。
- (38) 桜は満開の花を咲かせる 때가、もっとも生き生きとし、幸福感に満ちている、と山内先生は思っている。
- (39) 桜と違って人間は「意味」を持っているので、「幸せになりたい」と思ってしまうものだ、と山内先生は考えている。
- (40) 学者は権力が好きなものだ、と著者は思っていた。
- (41) うるさい宴会は権力者が力をふるう場でもあるため、山内先生は嫌っている。
- (42) 盛り上がらない宴会に「神」である権力者が降臨すると、宴会は非常に盛り上がる。
- (43) 日本では、宴会が盛り上がらないと幹事のせいにされる、と著者は思っている。
- (44) 「人生」とは、入学や就職などの節目で、幸せを考えることだ、と著者は考えている。
- (45) 人生は、日々の営みの積み重ねによって作られる、と著者は考えている。

問8 枠で囲んだ文章に続くように、後ろの①～⑥の文章を並べ替え、その4番目と6番目に位置するものの番号を答えよ。

解答番号は4番目 46、6番目 47。

「面白い」という形容は、いろいろな意味で使われている。毎日、誰でも何度もこの言葉を口にするのではないだろうか。人にいう場合は、褒めたり、あるいは共感を求めるときに、また自分一人でも、ふと呟つぶやきたくなるときに、この言葉が出る。もちろん、それ以外に、皮肉を込めていうときもあれば、喧嘩けんかを買うような場合の台詞せりふでも使われる。

だが、基本的に「面白い」は、笑顔を連想させる状況を示している。楽しいもの、好ましいもの、自分が欲しかったもの、満足できるものに対する感想である。

大きく分けると、笑えるような「面白さ」と、笑うわけではないが興味をそそられる「面白さ」があるように思われる。きつちりと分かれてはいないし、両方の要素を持っているものも沢山あるだろう。

まず、見ただけ、聞いただけで笑えるようなものを、「面白い」という場合、これは、「可笑おかしい」と同じ意味だ。

たとえば、漫才や落語などは、笑うことを楽しみにして観るものだろう。笑わせてくれる人に対しても、「面白い人だ」という。逆に、さほど笑えなかった場合は、「面白くなかった」という。漫才や落語に対して、「笑えないけれど、面白い」という評価はあまりない。あくまでも、可笑おかしさが、面白さとイコールなのだ。

人が笑うのは、泣いたり、怒ったりするよりも良い状態であることは、誰もが知っている。笑っているから良い状態ではなく、良い状態だから自然に笑う。そういうふうに人間ができている。「笑う門かどには福きた来る」という諺ことわざがあるとおり、幸せを連想させる感情でもある。

「面白い」には、それ以外の意味もある。たとえば、なにかに嵌はまっている状態のとき、人はそれを「面白い」と感じる。「嵌まる」というのは、最近使われるようになった形容だが、「夢中になる」という意味だ。夢中とは、興味が集中する状態であり、ある対象に「興味を持った」ときに、それを、「面白い」と形容することになる。

この「面白い」は、ギャグで大笑いする「可か笑せしい」とは、明らかに違う。笑顔になることはあるかもしれないが、どちらかというと、知的好奇心を掻かき立てられるような場合だ。たとえば、数学の問題やパズルなど、一見難しそうな問題に直面したときにも、「面白い」という人たちがいる。顔は笑っていない

いかかもしれない。真剣に考えようとして、眉を擡^ひめていられるかもしれない。そんな場合でも、「面白い」という言葉で表現する。「夢中になれそうだ」と感じているからだ。

実際に、その種の問題を解く行為が好き人も多い。ミステリイに登場する名探偵も、難事件に遭遇し、不可解な状況に直面するほど、「面白い」と呟いたりするものである。この台詞を聞くと、読者や視聴者もわくわくして、「面白くなってきた」と思うのではないか。

① 「面白い」に似た言葉としては、「楽しい」がある。

② コレクションをしている人が、今まで見たことがない品物に出合ったときなどに、目を輝かせて「面白い」と呟く。日本庭園や茶室などで、凝った造形を見て、「面白い」と思う。また、スポーツをして、一息ついたときなどに、「面白い」と感じたりするだろう。

③ 人によってさまざまなものを楽しむことができるので、たとえば、「楽しいもの」とは何か、どういう意味なのか、と尋ねられても、簡単に説明ができない。だが、面白いものは楽しいし、楽しいものは面白いものだ。

④ 長閑^{のどか}な自然の中で写生をするときには、絵を描きながら「面白い」と思うだろうし、登山をしている人は、山頂が近づいてくると、疲労も忘れて、「面白い」と感じる。「面白くない」ことは、人間は続けられない。何度も同じようなことをするのは、「面白さ」をまた味わいたいからだ。

⑤ 共通しているのは、どれも、自分にとって好ましい状態であること、自分が好む状況になること、といえるだろう。ほかの言葉にすれば、「満足」が近いかもしれない。

⑥ 「面白い」の使い道は、だいたいこの二つに集約されそうだが、実際には少しニュアンスが違う。「面白い」もある。たとえば、「珍しい」、「趣^{おもむき}がある」、「気持ちが良い」といった意味で、「面白い」というときがある。

(森博嗣『面白いとは何か？面白く生きるには？』による。一部改変。)